

ONE'S voice

野田秀樹 × アイタイヒト



VOICE.1

ディディエ・デシャン

人が集まる 自由な空間を目指そう

「人が集まりたくなる場所」を目指して劇場改革を進める野田と、ダンスの地位を高めようと奔走するパリ・シャイヨー宮国立劇場のデシャン。柔軟な発想の2人の芸術監督が、理想の劇場の姿を語り合った。

デシャン 東京芸術劇場は、外から見ると街の中心に位置するのを感じられますね。私はそのことに、まず驚きました。現代建築の建物は、ガラス張りや自然光が入ってくるし、舞台を覗いて来る人も、そうでない一般の人も、自由に往き来できる雰囲気が出ています。まるで古代ギリシャ時代のフォーラム(公会広場)のように、人々が集い、言葉を交わしている。そんな開かれた印象を受けました。

野田 実は、改装前はあまりそういう場所ではなかったんですよ。人はここを通行するだけで、集まって留まることは少なかった。だいたい人が集まるためには、「あそこなら行ってみたい」と思われるような空間であることが必要ですよ。劇場にとっても、それはものすごく大事な要素だと思うんですが、日本の劇場には、そういう場所が「無い」とは言いませんが、劇場内部のことは考えても、周辺や街との関係については、あまり気にしない傾向が強いと思うんです。今回はそのあたりをかなり意識して改修していて、このいま僕たち

がいる1階エントランス部分のカフェのように、人が溜まれる店を入れて欲しいという、テナントの要望まで出しました。おっしゃっていただいたような印象が変わって、よかったなと思っています。デシャン うらやましいですね。シャイヨー宮劇場は、残念ながら上演前後の時間帯しか、中を出入りできないんですよ。野田 法的に難しいんですか？デシャン いいえ、予算上の問題です。シャイヨー宮はたくさんの方が出入りする広大な施設(注:劇場以外に建築・文化財博物館など3つの博物館を擁するほか、エッフェル塔がよく見えることで知られる観光名所でもある)なので、管理に相当数のスタッフを要するんです。それに、歴史的建築物に認定されているので、新しく塀を建てたり、出入りを細かく制限することも許されません。それで結局、公演がある時以外は敷地内に入れない場所になってしまっているわけです。私個人としては、自由に出入りできることが望ましいと思っていますんですけどね。

野田 ディディエさんは、芸術監督になられて何年くらいですか。

デシャン 2年前に指名され、準備期間を経て1年前に就任しました。現在2シーズン目に入ったところです。

野田 ヨーロッパは芸術監督制が定着していますが、日本はそこまでいっていないので、「芸術監督ってどういうことですか」とよく聞かれるんです。この質問をディディエさんにしてみたいんですが、どういう風に考えていますか。

デシャン シャイヨー宮劇場での私は、総監督と芸術監督という二つの職責を与えられています。芸術監督としては、9月から翌年8月までの上演作品と、アート活動全体のプログラムを決定しています。ふつうフランスの国立劇場では、芸術監督が自分自身の作品を年に数本上演しますが、私はシャイヨーに来た1年目は振付家・ダンサーとしての自らの仕事は休止しまして、今シーズン初めて、自分の作品をラインナップに加えたところです。ほかに、フランスの地方や外国など、内外の

演劇やダンス公演の招聘も行っています。

野田 ということは、私がやっていることも、だいたい間違いではないということですね(笑)。僕は総監督としての仕事は、別のところをお願いしているんですけど。

デシャン 総監督としては、政治・予算・行政に関わる全責任を負っています。もちろん私ひとりではなく、各部門にスタッフがいて、チームとして仕事をしているわけですが。

野田 僕の場合は、そこを切り離していることで、不満を感じることもあります。「どうしてそこでお金の問題が生じて、すべての流れが止まってしまうのか」といった障害にぶつかるたびに、総監督の部分まで手を出していれば……とは思いますが、たぶん相当大変な仕事でしょうね、政治や経済のことまで絡んでくると。

デシャン ええ、やりたくない日もありますよ(笑)。総監督は誰かに任せたいと思うこともあります。シャイヨー宮劇場は現在、フランスで唯一、ダンスをメインに上演する国立劇場で、これは多くの

ダンサーたちが奮起して、初めて実現したことなんです。ですから私も、ダンサーが国立劇場を指揮できることを証明するために、初年度はクリエイターとしての仕事を減らして、運営に絞ってがんばったわけです。フランスでは、コンテンポラリー・ダンスは盛んではありますが、やはり第一にクラシック系音楽、続いて演劇が優位にあって、ダンスはまだステータスの低い芸術とみなされています。国立劇場という場を得たことで、ダンスが広く認められ、その地位を引き上げることが、ダンサー出身の私の使命だと思っているんです。野田 フランスでダンスの地位が低いということは、逆にどれだけ音楽と演劇への予算が大きいのか、ということなのでしょうね。日本の現状とは比べものにならない。

デシャン もちろんダンスだけでなく、演劇も積極的に上演していこうと思っています。シャイヨーは多くのフランスの重要な演劇人が仕事をしてきた劇場ですし、行政は我々を区分しますが、アーティストは、元来枠から自由な存在



今回の
アイタイ
ヒト

ディディエ・デシャン

DIDIER DESCHAMPS パリ、リヨン、ニューヨークなどでダンスやパフォーマンスを学び、ダンサー、振付家として活躍。自身でカンパニーを持つほか、リヨン・オペラ座バレエ団、アンジェ国立現代舞踊センター、ロンドン・コンテンポラリーダンススクールなどで振付や指導を行ってきた。2000~11年までフランス国立ロレーヌ・バレエ団芸術監督、11年7月よりパリ・シャイヨー宮国立劇場の芸術監督を務めている。

Q.あなたが抱く日本のイメージは？

すべてが効率よく進み、細部まで行き届いている国。フランスは、よく言えば自由で臨機応変。悪く言えば行き当たりばったりなので真逆なんです。日本人は実に几帳面で用意周到。だってほら、この質問だって事前に準備されてたわけでしょう？

野田秀樹

HIDEKI NODA 劇作家・演出家・役者。1976年に劇団「夢の遊眠社」を結成。数々の話題作を上演し演劇界に大きな影響を与える。92年に劇団を解散し、ロンドンへ留学。帰国後の93年に「NODA・MAP」を設立し、『キル』『パンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・ダイバー』『ザ・キャラクター』など、次々と話題作を発表。国内のみならず海外の演劇人との創作活動や、歌舞伎の脚本・演出なども手掛け、精力的に創作に取り組む。2012年『THE BEE』English & Japanese Versionは、ワールド&ジャパンツアーとして、世界3都市、日本5都市にて上演。09年より、東京芸術劇場芸術監督に就任。10月28日までプレイハウスにてNDOA・MAP第17回公演『エッグ』を上演。

のはずですからね。私が昨夜この劇場で観た『エッグ』がいい例です。芝居だけでなく、ダンスと歌も含まれていましたし、シリアスな場面で、爆笑が起きていたのも印象的でした。私にとってアーティストは、芸術を通して世界を別の方法で見せてくれる存在ですが、野田さんの『エッグ』は、まさしくそんな作品で、観客を独特の美で豊かにしながら、しっかりと問題提起を行っていた。実にポジティブな作品で、たいへん気に入りました。ぜひ、いつか野田さんの作品をシャイヨー宮劇場にもお招きしたいと思っています。

野田 もちろん、喜んでうかがいます。シャイヨー宮劇場のような素晴らしい劇場で上演できるのは、演劇人としてとても幸福なことだと思いますから。

デシャン パリの観客にとっても、野田さんの作品に出会えることは、幸せに違いないと思います。お越しいただくことを楽しみにしています。

取材・構成:伊達なつめ
協力:パル・オーブ東京芸術劇場店